

Special Needs Education Research Center

SNERC通信

(第38号-2015年10月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：宮本 信也
 〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
 TEL：03-3942-6923
 FAX：03-3942-6938
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>
 mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp

「多様性」の時代の羅針盤として

筑波大学特別支援教育研究センター 岡 典子

今年9月、欧州の新聞各紙は、幼いシリア難民の男の子が痛ましい姿となってトルコの海岸に横たわる写真を一斉に掲載した。シリア内戦の長期化により、国を逃れようとするシリア人の数はかつてないほどの規模で急増している。国連によれば、人口2300万人ほどのシリアにおいて、なんとそのほぼ半数が難民化している可能性があるという。



こうした難民の問題は、彼らにとって新たな定住の地となる国の学校教育にも重大な課題をもたらす。昨年、ドイツ南部のある地域で現地の学校を訪れた際の印象は衝撃的であった。同国では今も、多くの州において、子どもは小学校を終えると、学力と将来の進路希望に応じて異なる中等学校に進学する。学習に困難のある子どもが通う中等学校で目についたのは、多様な人種や文化的背景をもつ大勢の子どもたちだった。その一方で、大学進学を旨とする中等学校にいた圧倒的多数は、ヨーロッパ系人種の生徒たちだった。

障害、人種や民族、経済格差、宗教……。インクルーシブ教育の本質は、子どもたちのもつ多様性を歓迎し、すべての子どもの発達を保障することにある。しかし、日本に住む私たちはインクルーシブ教育、あるいはダイバーシティといった問題を考える際、ときとして無意識のうちに「多数者」が「少数者」に配慮することといった固定的な枠組みのなかで解釈していないだろうか。たとえば日本人が外国人に。あるいは障害のない人が障害のある人に。しかし、21世紀の国際社会においては、「多数者」と「少数者」の関係はもはやきわめて流動的、可変的なものとなりつつある。移民国家アメリカがいち早くインクルーシブ教育を導入した理由のひとつには、21世紀のあいだに人種的多数者（ヨーロッパ系人種）と少数者（アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系等）の人口構成比が逆転するとの予測があった。上述の難民問題についても、おそらく本質的には、多数者であるEU諸国の国民が少数者である難民を受け入れるという単純な構図のなかで捉えるべき課題ではないのだろう。

人々のもつ多様性は、社会に大きな財産をもたらす。一方で、急激な多様化の進行は、一時的にせよその社会に困難な課題を生じさせるのも確かであろう。しかし、ひとつだけいえることがある。それは、少なくとも学校教育において、歴史上も今も、もっとも「多様性」に寄り添い、多様な子どもたちのもつ可能性を引き出してきた分野は間違いなく特別支援教育だということである。なぜなら多様性への着目は、障害のある子どもに対する教育の本質であり、その視点を抜きにしては特別支援教育の発展はあり得なかったからである。だからこそ確信する。特別支援教育こそは、いっそう多様化が進むであろう21世紀において、社会はいかにあるべきか、人々はいかに寄り添うべきかを示す羅針盤となるべきなのだ。

■平成 27 年度 筑波大学免許法認定公開講座

筑波大学免許法認定公開講座は、平成 16 年の特別支援教育研究センター開設以来、筑波大学人間系（障害科学域）附属特別支援学校 5 校との連携のもとに実質上の企画運営を本センターが行ってきました。今年度も 7 月 27 日(月)～8 月 7 日(金)の 12 日間 10 講座を実施し、全国からのべ 543 名の方が受講されました。

本講座では必要に応じて情報保障とし



て、パソコン要約筆記や点訳資料の配付等も行っております。今年度は、昨年度と同様、講義形式の他に、グループ討議形式、実技や体験を取り入れた内容などで行われました。人間系及び附属学校の先生方をはじめ、協力して下さった皆様方には心から感謝申し上げます。

本講座の受講者アンケートの自由記述では内容について、「分かりやすかった、現場で使える、高い専門性がある、全体を通じて充実感、満足感があり勉強になった、具体的な指導場面が良かった、筑波大学で受講して良かった」など好評価を頂きました。しかし講義室の空調や資料準備等の受講環境については、改善すべき点があるとのことのご意見を頂いておりますので、今後活かして行きたいと思っております。

また、受講した最も強い動機に関する質問には、免許取得の必要性以外にも「専門的な知識を身につける」ことを目的として受講したとの回答が多くあり、受講意識の高さが伺えました。



■受講した最も強い動機をお答えください。(複数回答不可)

上位の免許状を取得するため	特別支援学校の免許取得が必要と感じた	特別支援学校、特別支援学級や通級指導教室に勤務している	特別支援学校、特別支援学級や通級指導教室への転勤を考えている	通常学級で特別支援が必要な児童生徒を担当しているため	専門的な知識を身につけるため	管理職に勧められたため	その他
22	31	11	9	5	31	0	1

平成 27 年度免許法認定公開講座の受講者アンケートの結果より(数字は人数を表す)

■附属ニュース（附属大塚）

附属坂戸高校との交流学習

高等部の夏の登校日に行われるキックベースボール大会に向けた練習に、附属坂戸高校の福祉科の希望生徒約 20 名が参加してくれました。初日は自己紹介や椅子取りゲームなどを行ない、2 日目はキックベースボールの練習をしました。ボールを投げる、蹴る練習等を一緒にすることで、初日はやや表情が硬かった両校の生徒たちも、相手の名前を呼んだり、「こっちだよ～」と声を掛け合ったり、親和的になる様子が伺えました。

附属大塚特別支援学校 高等部主事 根本文雄
(キャッチボール)

(ゲームで交流)



■特別支援教育研究センターセミナー

シリーズ特別支援教育の伸展(4)―障害種を超えた教材活用の可能性―

1. 日時： 平成 27 年 11 月 7 日（土） 13:00～16:30 受付 12:30～
2. 場所： 筑波大学東京キャンパス文京校舎 1 階大講義室（134 講義室）
3. プログラム

第 1 部「筑波大学附属特別支援学校教材・指導法データベースに期待すること」

話題提供者 宮崎善郎氏（筑波大学特別支援教育研究センター教諭）
指定討論者 佐島 毅氏（筑波大学人間系准教授）
田原佳子氏（千葉県立千葉聾学校教諭）
飯田昌男氏（文京区礪川小学校教諭）

<休憩>14:25～14:40

第 2 部「筑波大学附属特別支援学校の特色ある実践事例とその応用可能性」

話題提供者 左振恵子氏（筑波大学附属視覚特別支援学校教諭）
漆畑千帆氏（筑波大学附属大塚特別支援学校教諭）
鈴木 泉氏（筑波大学附属桐が丘特別支援学校教諭）

4. 申し込み

メールもしくはファックスでお申し込み下さい。（定員 100 名）

mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp fax: 03-3942-6938

* 教材及びデータベース試作版を 12:00～13:00 まで、122 講義室で展示しています。

■現職教員研修生日記

本センターでは、高い専門性を持つ教員の養成を目的とし、一定の教育経験を持つ教員等を対象に研修生の受け入れをおこなっています。このコーナーでは、研修生の皆さんに日々頑張っていることなどを寄稿して頂きます。

埼玉県立特別支援学校塙保己一学園 岩田 理恵

4月から筑波大学特別支援教育研究センター研修生としてお世話になり、半年が経ちました。開校式の日からしばらくは先の見通しがもてず、「これからこの1年、自分はどう研修を進めていったら良いのだろう・・・」と不安や焦りでいっぱいでした。そのような中、指導教官の佐島毅先生の熱心なご指導やセンターの先生方の温かいご支援をいただき、少しずつ自分のやるべきことが見えてきました。



センターでの講義、附属学校での授業見学や演習では特別支援教育について幅広く、また、大学での講義の聴講では視覚障害について学んでおります。研究室での教育相談も見学させていただき、自分よりも一回り以上若い学生さんたちの、子供の課題を捉え、かかわっていく逞しい姿にいつも感心させられています。

自身の研修としては、視覚障害のある重複障害児の見通しをもつ支援について、5月から附属視覚特別支援学校幼稚部で事例研究をさせていただいております。幼稚部の先生方には、お忙しいにもかかわらず、対象児への支援の方法や教材の検討等、話し合いをもつてくださり、大変感謝しております。

所属校の一つでも多く還元できるよう、残りの研修期間も、学ぶことに感謝しながら同期の研修生とともに有意義に過ごしていきたいと思っております。



北海道手稲養護学校 奥田 裕幸



今年度、筑波大学特別支援教育研究センターで現職教員研修生としてお世話になっています。センターのすばらしい環境の中で、附属5校での演習・見学など幅広い知見を学べる研修は、常に新しい刺激があり創造していた以上の多くのことが学んでいます。今回、貴重な研修の機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。特に指導教員の安藤隆男先生からは、研究の進め方だけでなく、自分自身の

経験を振り返り子どもの学びを深く考え直す導きとなる言葉を多くいただいております。ていねいなご指導深く感謝申し上げます。

9月17日の中間報告会では、同じ研修生の仲間の研修内容を知ると共に、自分の研修テーマについてセンターの先生方からご助言をいただくことができました。一人でいくら考えても気づけなかった視点を得られることでの自分自身の成長を感じます。研修テーマは、個々の教師の成長を学校全体で支えるための「同僚性に基づく協働」としました。経験豊富な先生の経験から学ぶことで、同僚性のあり方や背景について理解を深め、北海道での実践につなげる決意です。残り6カ月の研修期間、1日1日の学びを大切にして過ごしたいと思っています。ご指導よろしく申し上げます。